

伝統繊維はデザイナーの知恵を欲している ①

用途は和服に留まらない、有松の絞り染め

絹や綿だけでなく、ウール、化学繊維、革にも施せる。
豊かな表情とストレッチ性が素材としての強みだ。

布の1部分をつまみ上げ、糸を硬く巻き付けて防染する。染色すると、糸を巻き付けた部分だけが染まらず、独特の模様とシワが浮き上がる。絞り染めは日本に古くから伝わる伝統技法の1つだ。

「最大の特徴は、絞ることによって生まれる抜群の伸縮性。機械で作るブリーツやエンボス加工よりも伸縮率は高い。また、不規則で素朴な風合はハンドメイドでしか出せない」。和装用途の布のみならず、三宅一生やコシノヒロコなど、著名なファッションデザイナーに斬新なテキスタイルを提供してきた実績もある久野染工場の久野剛資社長は、絞り染めの魅力をこう説明する。

久野社長はいま、伝統的な技法にとら

われない新しい絞り染めテキスタイルの開発に意欲を燃やす。工場の2階にある倉庫をのぞかせてもらった。

そこには、光沢のある化学繊維に絞りを施してしわくちゃなまま形状安定させたもの、絞り染めた布をわざとプレスしてウロコのようなシワを出したもの、ベルベットにステッチ状の絞りを施したもの、和紙布ににじみ模様を絞ったものなど、これまでに見たことがないようなユニークなテキスタイルがところ狭しと陳列されている。

下の写真はこういった新しい取り組みのほんの一例だ。これほど表情豊かな繊維素材は絞り染めを置いてほかにない。

綿や絹に限らず、ウール、化学繊維、

革にも絞り染めは施せる。また、防染プロセスは多岐にわたり、布に糸をくくり付けるやり方だけでなく、布をひねったり、板で挟んで締め上げたりして、独特のシワや染めムラを作る手法もある。素材と手法を掛け合わせれば、絞り染めの種類は無限だ。ストレッチ性を生かせば、機能的な素材として、さまざまな用途を見込めるだろう。

久野染工場のある名古屋市の有松鳴海地域は「有松絞り」で知られ、かつては絞り染めの一大産地として栄光を極めた。しかし、和装離れから呉服産業が低迷し、絞り染めはその打撃をも直接受けた。また、手作業で手間のかかる絞り作業が人件費の安い海外に流れ、価格競争

が進み、絞り染めの値段も価値も落ち込んだ。久野社長が新しい絞り染めを開発に打ち込むのは、こういった衰退を目の当たりにしてきたからだ。

手間が価値を生む時代ではない

「1枚の布にどれだけたくさんの絞りを施せるかという点に絞り染めの価値を見出したのは昔のこと。今は、極端な話、たった1カ所だけしか絞らないとしても、その1カ所の絞りがだれにも真似できないくらい高いオリジナリティーを持つべきで、その点に価値を見出していかねばならない」。

久野社長は、有松絞りが、市場のニーズやトレンドに適應した魅力ある素材と

して生まれ変わる必要があると痛切に感じている。

「絞り染めを使った新しいモノ作りに挑戦したい。そこにデザイナーの力を必要としている」(久野社長)。用途は和装に留まらない。ソファやカーテンなどのインテリア製品はもちろん、照明や家電、自動車の内装など、プロダクトデザインにも使える可能性は大いにある。

折りしも和装文化が見直され、若い世代の間で和装に興味を持つ人が増えている。海外にもジャパニーズカルチャーの信奉者は多い。伝統素材を使って、現代に通用する商品を生み出すのはデザイナーの仕事だ。絞り染めに関して言えば、その素材はすでに豊富に用意されている。

久野染工場の絞り染め

左から、光沢のある化学繊維に不規則なシワを施した絞り。ウールを特殊な液に浸し繊維の密度にムラを出した絞り。蛍の光のような模様を染め上げた絞り。とうもろこしの繊維を原料とした薄い布を絞り、その上にオーガジーを重ねたテキスタイル。問い合わせ先：久野染工場 (<http://www.shibori-zome.com/>) *